【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻
英語教授学領域
飯尾　豊

【論　　文　　題　　目】　An analysis of English verb-particle combinations: A corpus-informed study applied to English language teaching
（英語の動詞・不変化詞結合の分析－コーパスを用いた英語教育への応用研究－）

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、動詞不変化詞結合・理論的背景・研究方法等に関する包括的な先行研究、事前調査等を踏まえ、主としてコーパス言語学と誘出法（elicitation approach）を活用し、認知言語学的アプローチを取り入れて、日本人 EFL（外国語としての英語）学習者の動詞・不変化詞結合の使用の特徴を分析・考察するとともに、今後の英語教育への示唆を提案することが研究目的である。

第 1 章では、本論文の研究背景を述べ、次の 3 つのリサーチクエスチョンを提起している。(1)日本人英語学習者は英語母語話者よりも、量と種類の両方において、英語句動詞をより少なく使用する傾向があるか。(2)句動詞のタイプ（比喩的、字義通り）の意味的性質の違いが、日本人英語学習者の句動詞の使用に影響を与えているか。(3) 日本人英語学習者の発達段階（レベル）は、誘出テスト（elicitation test）の種類（多肢選択、翻訳等）により異なる、学習者の句動詞のパフォーマンス（タイプ）に関係しているか。

第 2 章の先行研究では、意味スケール分析、Gries (2000) 等の認知言語学的アプローチによる「程度性（gradience）」の概念の重要性を指摘している。また、先行研究には句動詞を扱う研究が多い傾向があるが、本論文では、同じ動詞不変化詞結合である前置詞付き動詞の分析も行うとしている。さらに、先行研究を整理した上で、句動詞には「字義的」「慣用的」「アスペクト的」の 3 種類があり、前置詞付き動詞には、「字義的」「慣用的」の 2 種類があるとし、これらを区別するためには、文法的・意味的な程度性の観点からのコーパス分析が必要であることを提起し、本研究の位置付けを明確に行っている。

第 3 章では、中学・高校の英語教員へのアンケート調査を行った結果を報告している。現状では、句動詞がカリキュラム・指導等において重視されておらず、教科書の内容においても、句動詞の扱いは不十分であると回答したとしている。また、中学・高校の英語教科書をコーパス化し、分析した結果として、句動詞は前置詞付き動詞と比較して、少なく扱われる傾向にあると指摘している。

第 4 章の研究方法では、データの収集・分析の妥当性を高めるために、最近のコーパス研究で活用されている、コーパス分析のアプローチと誘出テストを組み合わせた研究方法を使用したとしている。日本人の初級学習者と上級学習者、日本人英語学習者と他の非英語母語話者学習者、英語母語話者と日本人英語学習者の句動詞の使用パターンを比較するために、中学・高校生が対象の JEFLL (Japanese EFL Learner) コーパス、大学生が対象の NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) 等の日本人英語学習者コーパス、G-ICLE (German Component of the International Corpus of Learner English) 等の非英語母語話者学習者コーパス、COCA (Corpus of Contemporary American English) 等の英語母語話者コーパスを分析した。英語句動詞の使用と回避の傾向を調べるために、Liao and Fukuya

(2004) の誘出テストを活用した。この句動詞に関する誘出テストを日本人高校生・大学生と英語母語話者(留学生) を対象に実施した。

第 5 章の分析結果は次のとおりである。リサーチクエスチョン(1)に関しては、日本人英語学習者は英語母語話者よりも、句動詞の量と種類において少なく使用する傾向にあることが判った。リサーチクエスチョン(2)では、日本人英語学習者は比喩的意味を持つ句動詞を字義的な意味の句動詞よりも避ける傾向にあること(句動詞の回避はその意味のタイプに影響を受けること) を示しているとしている。リサーチクエスチョン(3)では、特に多肢選択式の誘出テストの結果において、日本人上級英語学習者は比喩的意味を持つ句動詞を、より避ける傾向にあるとしている。また、高校生、大学生、英語母語話者の３群の誘出テストの結果には統計的有意差があったとしている。さらに、布置図でカテゴリー間の差・類似性を視覚的に提示する対応分析 (correspondence analysis) により、学習者コーパスにおける、トピックと句動詞の関係の強さ、コーパス毎に頻度の高い不変化詞を明示している。このような綿密な統計分析は評価に値する。

第 6 章の考察では分析結果を踏まえて、日本人英語学習者の様に L1(母語) に句動詞が無い学習者は、L1 に句動詞があるドイツ人英語学習者等とは異なり、より句動詞の使用を避ける傾向があるとしている。また、JEFLL コーパスにおける動詞: make の意味分析を踏まえて、日本人学習者は動詞の抽象的な意味よりもコアな意味を使用する傾向にあると指摘している。

第 7 章の教育的示唆では、コーパス分析等に基づいた、学習者のレベルに応じた句動詞に関する教材と学習活動の例を提案している。特に、コーパスの開発者の了解を得た、COCA 等を活用した字義的、比喩的な意味を持つ句動詞の教材例は、今後の効果的な句動詞の教材開発・指導に寄与すると考えられる。

本論文が、誘出テストを実施・分析するとともに、句動詞・前置詞付き動詞について多様なコーパスを比較分析している点は、先行研究にあまり見られない独自性と意義であると考えられる。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成２６年１月２０日(月)に、審査委員会委員５名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文の研究目的・方法・成果及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切になされ、申請された学位論文が博士の学位を授与するに値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査　山下　徹
委員　アイズマンガー　イアン
委員　ラスカウスキー　テリー
委員　福澤　清
委員　サガズ　ミシェル